

国士舘大学審査学位論文

「博士学位請求論文の内容の要旨及び審査結果の要旨」

「近代国民国家の形成と博覧会の役割

—西洋、日本及びインドネシアの比較研究—」

M.ジャクファル・イドルス

氏 名	M. ジャクファル・イドルス
学 位 の 種 類	博士（政治学）
報 告 番 号	甲 第 5 1 号
学位授与年月日	平成 3 1 年 3 月 2 0 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	近代国民国家の形成と博覧会の役割 ー西洋、日本及びインドネシアの比較研究ー
論 文 審 査 委 員	（主査）教授 佐藤 圭一 （副査）教授 岡田 保良 （副査）講師 高地 薫（神田外語大学）

博士論文の要旨

論 文 題 目 近代国民国家の形成と博覧会の役割

ー西洋、日本及びインドネシアの比較研究ー

氏 名 M. ジャクファル・イドルス

近代国民国家の形成と博覧会の役割

—西洋、日本及びインドネシアの比較研究—

論文要旨

M. ジャクファル・イドルス

本論文は、国民国家の形成の過程において博覧会が国民意識の形成に果たした役割に焦点を当てる。第 1 に博覧会という「装置」が発想された西欧国家の博覧会、第 2 に、西欧に大きく遅れて近代化を始め、西欧各国を目標として西欧に並ぶ近代国家・帝国主義国家の達成に全力をあげた日本の博覧会、第 3 に、オランダの支配下に植民地を経験したインドネシアの博覧会を取り上げ、比較研究の視点から議論し、検討を行なう。

19 世紀から 20 世紀にかけて世界の構造は大きく変化を遂げた。この帝国主義の時代に、強者と弱者、先進と後進、「文明」と「野蛮」といった対立構造による世界のカテゴリ化、オリエンタリズムによって西欧中心として世界がヒエラルキー化・一元化された。この構造は 20 世紀初頭までに、帝国主義列強による植民地分割によって世界を覆った。その構図は、思考・行動様式を含めた「文化」、血のつながり、地域共通性による「科学」や「歴史」を拠り所として「聖性」を付与され、強化され浸透していく。欧米諸国による帝国主義や植民地主義は、この「聖性」という正統性を生み出した「知」による「無知」の支配であった。この「知」は、大航海時代以降の非ヨーロッパとの接触、そしてルネッサンスを契機として形成された、博物学的思考である。人間を含めたあらゆるモノを理性によって分類、系列化するその思考は、モノを蒐集し、分類・系列化して展示する博物学的空間で、視覚化された。この視覚的表象がもっとも効果的に活用され、「聖性」を形成する「場」として機能したのが博覧会であった。

博覧会の内容と性格から、万国博覧会の時代は三期に区分される。(1) 西欧で博覧会が誕生し基本的な形式が整う 1780 年代から 1851 年、(2)外国から出品者が参加し国際的な色彩を帯びる 1851～1900 年、そして(3)植民地分割が一段落し列強が植民地を博覧会展示物に積極的に組み込んでいく 1901～1940 年である。

博覧会は、イギリスで自国や地方の産業振興のために開催された即売展示会として始まった。その産業博覧会はフランスでも開催され、博物学的思考から展示物の分類・系列化が始まる。最初の万国博覧会と位置付けられるロンドンの第 1 回万国博覧会開催の背後には、フランスの保護貿易主義に対するイギリスの自由貿易主義があった。産業革命を一早く達成したイギリスは、他国との比較において、その先進的産業を見せ付けることができたのである。産業振興・生産技術情報公開という産業主義と、ある種のナショナリズムがその動機の主要部分を占めていることは明らかであった。

これに対してフランスのパリで開催された万国博覧会では、それまでの産業博覧会で始まっていた展示品の分類と系列化がより科学的に、かつ照合可能なシステムとして洗練され、その後の万国博覧会の雛形となった。このように、博覧会は国際的な規模になるにつれ、西欧国家間の比較を通した、ナショナリズムを涵養する場となっていく。

19 世紀から 20 世紀初頭、地球のほぼ全域が帝国主義諸国によって植民地化され、支配と被支配という構造が生み出さる中で、博覧会は政治的側面がより強くなり、帝国主義国家の正当性を強調するディスプレイの場に変化していった。

博覧会は、西洋の経済的・政治的支配下においた非西洋文化を「劣等」な「他者」として自分たちと区別し、分類し、視覚的に表象した。博覧会は、植民地展示という政治的性格を中心的な内容とし、外部には帝国主義国家として「強い国家」を演出し、国民には自らの「文明」や「進化」の偉大さを目覚めさせ、植民地に対する「優越感」を与えた。このようにして、非西洋は、一方的に西

欧帝国主義国家によって展示され、その展示は帝国主義国家に従属すべき、あるいは保護されるべき弱者のイメージを付与されていった。

欧米列強が世界を植民地分割した 19 世紀に、植民地化を回避した日本は明治維新以降、西欧の近代国民国家・帝国主義国家を目標として急速に国家基盤の整備を図り 20 世紀に入ると列強の一角を占めるようになる。明治期の日本は「文明開化」を通して西洋の文明を導入・摂取しようとした。なかでも、博覧会を「文明開化」のシンボリック事業として捉えていたが、博覧会との関係においても日本は稀有な存在であった。

日本は、明治維新以前から西洋の万国博覧会に参加し、西欧視察の際に幾度も博覧会に使節団を派遣していた日本は、万国博覧会を帝国主義諸国の「文化の比較観察の場」と理解した。日本が万国博覧会への参加に対しては、近代産業においてはまだ欧米に敵わない以上、出品物はいたずらに西洋風を追い求めず、伝統工芸・美術を用いて、諸外国に対して日本文化が優秀なものであることを示し、国際社会に日本の存在をアピールする方針を採用した。その一方で国内産業の振興と国威発揚という近代の課題が万国博覧会への参加を通じて強く認識されたという点において、博覧会が日本に与えた影響は非常に大きいものであった。

「富国強兵」という国家目標を掲げた明治政府は殖産興業政策の一環として、万国博覧会への参加を通じて、西欧諸国から最新の製造技術や制度を摂取する一方、日本の伝統工芸品を広く海外に紹介し、輸出増進による産業振興を図ろうとした。更に、日本は博覧会という「空間」を通じて、「日本（文化）とは何か」という自己像の形成と、自己像形成のための他者との比較でを行なった。万国博覧会に出品された日本からの様々の伝統工芸品は「日本文化の代表」であり、内外に提示すべき日本の「正しい姿」の形成を助けた。また西洋で高い評価を得ることが文化的アイデンティティの形成に大きく影響していった。

国内に対しては、内国博覧会では日本各地、後には植民地や新領土の展示品が、分類され系列化されて展示された。各地にある「日本の」伝統文化とその

技術能力が再評価され、「日本」という枠組みに位置付けられて、来場者は日本をそのようなものとして理解する。博覧会は、世界に誇るべき伝統・文化を持ち、近代産業においても欧米に追い付かんとする日本を強調し、そのナショナリズムを高揚させて、日本人アイデンティティの確立と国民形成に大きな役割を果たした。

後発の帝国主義列強としての日本は、また、欧米と同じように、植民地や新領土を博覧会の展示物とした。強国であり近代化した日本を、植民地や新領土の住民に見せつけ、日本に恭順させるという意図はもちろんあった。しかしながら、彼らは単なる被支配者としてではなく、近代化した日本人の枠組みにいずれ入れるという前提のもと展示されたのであった。

オランダに植民地化され、後にその植民地国家がそのままインドネシアという国民国家として独立することになるオランダ領東インドは、宗主国オランダによって、植民地として万国博覧会に展示される対象となった。植民地の「原住民」、植民地の風景、植民地の伝統芸能などを前近代のかつ非文明的な「遅れた」世界として展示し、植民地支配の成果と実績、そして植民地国家の成立の成功を誇示することにより、オランダによる植民地支配の正統性を視覚的に証明した。他方、植民地の産品や文化を分類・系列化した展示は、東インドという、植民地化以前にはなかった、伝統的な王国や共同体を越えた空間をミニチュア化したものであり、それを端的に実体験できる場を「原住民」にも提供した。この博覧会という博物学的空間を通して、オランダ領東インドの「想像の共同体」が視覚可したのである。一方、オランダ領東インド政庁は「原住民」たちをオランダ本国に従属し、保護されるべき植民地国家のなかに取り込もうとしたのだが、「原住民」はその植民地空間をインドネシアという新しい民族運命共同体に変換し、オランダに従属するのではなく、それに並列されるべき国民国家として鍛えていくことを選択することになるのだ。

その運動が、具体的な政治的独立という形で実った後も、新たな国民国家の内実はまだまだ多様であり、国民統合には程遠い状態だった。この国民国家に

内実を与えるために、スカルノとスハルトはそれぞれ異なるアプローチを取ったが、いずれも博覧会および博物学的空間を活用して国民統合を図った点では一致していた。

西欧ないし欧米における博覧会が国民国家形成において果たした役割は、彼ら同士の比較による国民意識の形成と共に、植民地という「野蛮」な文化・社会と対照される自らの優位の意識とそれに基づく国民意識の涵養であった。一方、日本は植民地化を経ず、早い段階で博覧会の持つ産業振興の役割だけではなく、国民意識を形成する役割に気付き、これを有効に活用した。植民地の「原住民」や社会についても、いずれは「日本」の一部になるものとして扱った点で、これらを単に従属させるものとしてのみ扱った欧米とは大きく異なっていた。植民地化され「未開」社会と位置付けられたオランダ領東インドでは、博覧会で「遅れた」ものとして陳列された社会・文化を自らのものと認識することで、東インド全体が自らの生きる空間として定位され、その生きる自らを一つの国民として構想していくことになる。そしてインドネシアという名前を与えられたその国民と領域は、インドネシア・ナショナリストによって、オランダなど宗主国に従属するものではなく、並置されるものとして位置付けられ、その地位を獲得していく。脱植民地化した国民国家は、程度の差こそあれ、インドネシアが経験したような博覧会ないし博物学的空間の作用によって成立したと考えられる。

氏 名	M. ジャクファル・イドルス
学 位 の 種 類	博士（政治学）
報 告 番 号	甲 第 5 1 号
学位授与年月日	平成 3 1 年 3 月 2 0 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	近代国民国家の形成と博覧会の役割 ー西洋、日本及びインドネシアの比較研究ー
論 文 審 査 委 員	（主査）教授 佐藤 圭一 （副査）教授 岡田 保良 （副査）講師 高地 薫（神田外語大学）

博士論文審査結果の要旨

論 文 題 目 近代国民国家の形成と博覧会の役割
ー西洋、日本及びインドネシアの比較研究ー

氏 名 M. ジャクファル・イドルス

平成31年3月7日

平成30年度 博士論文審査報告書

大学院 政治学研究科 政治学専攻

[illegible]

[備考]

1. 審査員氏名欄には、審査された3名の署名及び捺印をお願い致します。
2. 判定欄には、A、B、C及びD（不合格）を必ず明記して下さい。

講評

「近代国民国家の形成と博覧会の役割

ー西洋、日本及びインドネシアの比較研究ー

M・ジャクファル・イドルス

○本論文の内容と論理

本論文は国民国家形成に寄与した統合装置としての博覧会について論じたものである。勿論、博覧会に関する研究は、国内外を問わず相当な蓄積があることは事実であるが、それに対して筆者が強調するのは、博覧会の欧米における発展に関する研究、そして特に日本においては、自国にとっての博覧会の意味に関する研究は多いものの、植民地にとっての博覧会の意義に関する研究は殆どないことにある。しかも博覧会の政治・文化的意義を包括的に扱った研究はない。そのため筆者は本論文で、「1つ、博覧会が発明された西欧ないし西洋、2つ欧米に遅れて近代化を開始した日本、そして3つ目として帝国主義時代に「劣った」存在として列強に従属した植民地オランダ領東インドの三者における博覧会の歴史的・政治的展開と意義」を、類型化と比較の視点から明らかにしようとする。

筆者は、その博覧会の、ナショナリズムとの関連における意義を明らかにするにあたって、ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」論を先行研究とし、『想像の共同体』の「人口調査、地図、博物館」における議論を前提にした議論を展開する。

本論文の第一部では、博覧会が生まれる背景となった「博物学」的な思考・視線の誕生、極めて実践的・実利的な目的から生まれた産業博覧会が、国家的なイベントに発展し、国威発揚に利用され、政治的な意味を獲得して行く過程、そして「博物学」的手法により「世界」を分類・系統化して展示するなかで、植民地の社会・文化・人間が「遅れた」存在と位置付けられ、逆に西洋の優位性と植民地主義の正当化を「証明」する場となったことが解明される。

第二部では、帝国主義の時代に独立を保ち、近代化と中央集権国家の建設に成功した上、帝国主義列強に数えられるようになった日本を取り上げ、日本人が近代化の手段として利用した博覧会への参加や、その開催を通じて、近世までは存在しなかった「日本像」が半ば意識的に、半ば無意識のうちに形成されていく過程やロジックを明らかにしている。

第三部では、日本とは違い、植民地化され、それ以前の王国や共同体を越えた植民地国家が成立し、その発展型である国民国家として独立したインドネシアを取り上げる。博覧会において、「未開」な社会・文化に住む「原住民」とされたインドネシアの人々は、オランダ領東インドという領域にあるモノ・ヒトとして並列される。そのオランダ植民地支配下にあるという以外には本来的には意味のない並列されたモノ・ヒトの集合に「原住民」は新たな意味を見出して行く。すなわち、来たるべき国民像とその国家であり、またその胞芽的な共同体が、宗主国オランダとは並列されず、文明の序列では下位に置かれていることの矛盾の解明である。そして、独立後のインドネシアにおいても、博覧会やそれを支える博物学的思考が国民統合の装置とされる過程を究明している。

この三部の比較によって浮かび上がるのは、第一に、インドネシアのような、しばしば「人工的」に作られたとされる旧植民地国家における国民意識の形成において、博覧会に代表される博物学的思考とその空間が、極めて重要な役割を果たしたことである。第二に、インドネシアのような植民地が、宗主国によって「与えられた」空間から国民意識を生み出していかざるを得なかったことに対し、日本は自ら博物学的思考を習得すると共に、自らの国家・国民を構成する要素をその思考に沿って構成して行ったという、その特殊性である。

○本論文の評価と学術的位置付けについて

筆者が本論文で提示した博覧会および博物学的思考とナショナリズムの関係は、学術的にはどのように位置付けられるのかについて述べる。ベネディクト・アンダーソンの理論は、『想像の共同体』第10章における「博物館」の議論において明確に提示されているように考古学的発見を強調するが、本論文で取り上げられた博物学的な分類・系列化については、「シリーズ化」という概念を未消化なままの提示で終えている。アンダーソンがこの概念をより発展させたのは、『比較の亡霊』に収められている「ナショナリズム、アイデンティティ、系列性の論理」においてであり、ここでアンダーソンは、「非限定型／限定型の系列性」という概念を提示する。この二つの系列性の概念こそが、筆者が注目し、本論文で扱われた主要テーマであると判断される。

本論文の主眼である博覧会の植民地展示についての議論からすれば、「非限定型の系列性」とは植民地の文物であり「原住民」である。それらは、実際には固有名詞を持ちつつも、支配された「未開な」モノ・ヒトとして並列される。そしてそれらは、オランダ領東インドという枠組み、つまりは全体性に収められる。すなわち「限定型の系列性」の獲得を意味する。しかも、これは植民地であり、宗主国オランダに従属するものであり、それに並列されるものではありません。このオランダ領東インドという全体性に、「インドネシア」という名前を与え、国民国家に発展させようとするのがナショナリズムである。この発展はまた、オランダと東インドの支配・従属関係を、国民国家としての並列性ないし系列性に転換する運動でもあった。

このような理解は、アンダーソン理論の解釈、延いては博物館を通してのナショナリズム論を発展的に捉え、結果として新しい視点を伴う独創的で飛躍的な貢献を齎すも

のといえる。加えて先行する研究の価値を十分に把握し、その更なる深化を期して、博覧会の意味するところを縦横に比較研究し、しかも19万字を越える大作として展開したことからも、3人の審査員は一致して本論文は博士論文として条件・基準を十分に満たすものと判断した。

平成31年3月7日

主任審査員 （政経学部教授）

佐 藤 圭 一

